

徳川前期における明代古文辞派の受容と荻生徂徠の「古文辞学」

——李・王関係著作の将来と荻生徂徠の詩文論の展開——

藍 弘 岳

序

「古文辞学」とはなにか。一般的には、荻生徂徠ないし徂徠学派の詩文製作方法と經典解釈方法との二つの意味で理解されてきた。しかし、徂徠が「古文辞学」という言葉を使ったのはただ一度だけである。それは『訳文筌諦初編』^①「題言」「合古今而一之、是吾古文辞学」という一文である。ほかには、徂徠も「古文辞の学」（徂徠集卷二十七、答屈景山）という言い方もするが、「題言」では、「古文辞学」という概念が初めて提出されたのである。そこで本稿では、「題言」で論じられた秦漢以前の「古文辞」^②と唐詩の学習・制作の方法を「古文辞学」と捉えて議論を進める。そして、この意味での「古文辞学」の展開と徳川前期における明代古文辞派の受容との関係をテーマにして検討する。このようなテーマについては、既に多くの研究が蓄積されている。^③しかし、管見では、次の二つの問題は依然として十分に説明されておらず、より詳しい考察が必要である。まず、「古文辞学」がブームになる徂徠以前の徳川前期社会における明代古文辞派関係書籍の将来、出版および利用の状況が論じられてきたものの、東アジア全体を視野に入れて明代における明代古文辞派の著作の出版状況とそれ

らの著作が徳川日本に将来されて出版された情況とを比較して、全面的に整理、考察した論考はいまだないと思われる。こうした考察を通して初めて、徂徠以前の日本における明代古文辞派の流通と流行の状況をより適切に把握できると考えている。そこで本稿では、李・王（李攀龍と王世貞）をめぐる、徳川前期における明代古文辞派関係書籍の将来と出版およびその利用の情況を考察することを一つの課題とする。

さらに、「古文辞学」の流行のきっかけを作った荻生徂徠自身が、なぜ明代古文辞派に接近して積極的にその詩文論にコミットしたか、という問題がある。この問題については、吉川幸次郎は、徂徠が宋代の文章と異なる李王の文章の文体に現れた「言語の緊迫」に共鳴を覚えた⁽⁴⁾と、指摘している。さらに、吉川氏は、徂徠の「古文辞学」の主張と実践の確立について、徂徠が四十四歳ごろの綱吉の死に伴う吉保の失脚と徂徠自身の致仕という生涯の大転機との関連を指摘している。また、吉川氏は、それ以後の白石が主導する政治体制との緊張関係が徂徠学派の「古文辞学」のエネルギーをたくましくした、という見方を提出した⁽⁵⁾。この吉川氏の解釈は、その豊富な中国文学の学殖を土台とする文学観からの解釈だけではなく、当時の社会状況をも配慮した鋭い洞察である。それに対して、片岡龍が提出したのは、徂徠が明代古文辞派へ接近したのは「失われた中華を求めての遡行の意があった」⁽⁶⁾だけではなく、そこには「公安派の文学説と仁齋学との平行性」への着目があり、「当時の東アジア学術界に蔓延していた相對主義的な思考を包み込み、止揚する意図があった」という見方である⁽⁶⁾。この片岡氏の見方は、右の吉川氏の議論では十分に触れられていないところを補完するものと見ることができるといえる。

しかし、両氏を含めて従来の研究では、徂徠の詩文論と李・王を代表とする明代古文辞派、ないしほかの明代古文辞派の詩論にコミットした徳川儒者の詩文と比べて、そこにどのような異同があるかは、十分に説明されてこなかったと思われる。殊に中国文学の大御所である吉川氏は、明代古文辞派と徂徠との詩文を「退屈」と評したように、否定的に見ているところがある⁽⁷⁾。私が思うには、吉川氏の明代古文辞派に対する見方は、主として明代古文辞派に対して批判的な立場を取った錢謙益の見方に与して立てたものである⁽⁸⁾。そういう見方は、むしろ重要であるが、李・王の文学主張に深くコミットした徂

徂の文学思想を考察するために、より李・王そして徂徠の立場に立つ議論が必要なのではないか、と考える。さらに、右にも言及した吉川氏が提起した「言語の緊迫」とはおそらく、明代古文辞派における実字を多用して「修辞」を重んじることについて言っているのだが、「修辞」との関連で、明代古文辞派が詩文の「声」「色」「格調」などを重視することも、徂徠が彼らの文学に魅力を感じた要因であると考えられる。本稿では、このような考えのもと、両氏の議論を踏まえ、徂徠の「古文辞学」と彼が積極的に明代古文辞派の主張にコミットした理由およびその詩文論を考察する。

以下、右に提出した課題を検討する流れとして、まず、徳川前期における明代古文辞派関係著作とその文学主張の受容に関する考察を行なう。さらに、徂徠が積極的に明代古文辞派に取り組む理由とその詩文論とを検討して「古文辞学」の側面を明らかにする。

一 徳川前期における明代古文辞派関係著作・詩文論の受容——李・王の著作をめぐる

明代古文辞派関係の著作の一部は早くも、江戸初期の日本に将来された。この節では、まず、徂徠の『四家集』『唐後詩』が出版された以前、どれほどの明代古文辞派関係の著作が輸入・出版されたかを考察する。

1 徳川前期における李・王関係著作の輸入と和刻——徂徠以前

附録の表一と表二で整理したように、明末清初（明嘉靖末期から清康熙まで）では、重刊本・補修本などの版本の差異を別にしても、少なくとも五十七種類の李王を中心とした古文辞派関係の詩文集、及び『古今詩刪』を別にしても、二十一種類の李攀龍編集とされる『唐詩選』の異本が出版されていた⁹⁾。そのなかで、あれほど難読だとされた『李滄溟文集』は版を重ねて十三バージョンの明刊本が出版されていた。このことは、明代後期ことに万暦期における李の詩文の流行ぶりをよく

物語っている。ところが、明代中期以後、科挙に合格できなかった知識人を集めて編集チームを組んで模倣、剽窃などの手段によって、科挙のための実用書や有名人に仮託した評注がついた詩文選集などを編纂する多くの書商が現れた⁽¹⁰⁾。附録の表一と二に挙げた書物の多くも、そういう書商が著名人に偽託して作った本と思われる。例えば、後にも触れる『唐詩訓解』はその一つである。

次に、これらの書籍が、後述の徂徠の『唐後詩』が出版される以前の日本にどれほど将来されたのか、を考察する。表三で整理したように、類書に収録されたものと王世貞の史学関係の著作を除いても、少なくとも三十三種類の李・王の詩文関係の著作と七種類の『唐詩選』の異本が享保以前に輸入されたことが確認できた。すなわち、明代後期から清朝初期までに出版された李・王関係詩文集の半数ほどが日本に入ってきて来ている。実際の数はおそらくこれよりずっと多いと思われる。これはともかくとして、とくに注意したいのは、崇禎三年（一六三〇）に出版された『石倉十二代詩選』が寛永十二年（一六三五）に輸入されたことと、崇禎年間（一六二八～一六四四）に出版された『皇明經世文編』が寛永十六年（一六三九）に輸入されたことなどの例である。これらの書籍は、中国で出版されてから十年も立たない内に日本に持ち渡されたものである。このことから、徳川前期においては、一部の中国の書物が速いペースで輸入されていたことが分かる。

しかも、『唐後詩』が出版される前に、すでに多くの李・王の詩文関係の書物が日本に将来されたのみならず、その一部は和刻されていた。まず、『和刻本漢詩集成』⁽¹¹⁾によれば、李卓吾編『明詩選』（延宝六年）、汪萬頃選注・瀧川昌楽点の『皇明千家詩』（貞享二年）、李卓吾編『統皇明詩選』（正徳五年）、伊藤蘭嶠編『明詩大観』（享保二年）などが挙げられる。さらに、『江戸時代書林出版書籍目録集』⁽¹²⁾によれば、右の明詩集のほかに、『新刻陳眉公攷正国朝七子詩集註解』は元禄二年に出版されて「元禄五年刊書籍目録」にも掲載されている。そのほかに、注意したいのは、『唐詩選』の異本の一つである『唐詩訓解』が「寛文十年刊書籍目録」「寛文十一年刊書籍目録」「延宝三年刊書籍目録」「元禄五年刊書籍目録」に見られるということである。徳川前期では、『唐詩訓解』は次第に、『三体詩』と『錦繡段』など五山文学の伝統を汲んだ詩文集と

同じく、広く読まれるようになったようである。

2 徳川前期における明代古文辞学関係著作の流行とその評価

右のように、李・王を代表とする明代古文辞派の關係著作は、早くも江戸の始めから輸入され出版されるようになった。徳川儒学の祖ともいえる藤原惺窩と家康に仕えた若き林羅山との書信のやりとりの中で、すでに李・王關係の書籍とその内容に触れている。例えば、惺窩の羅山宛の書信には、「李于鱗帰足下之掌握否」「于鱗文不落足下之手云々。在足下則欲遂再見、在他則不要借焉⁽¹⁴⁾」などと再三に李の書の貸借を尋ねている内容がある。惺窩がいう「于鱗文」とはおそらく、羅山の『即見書目』に見られる『滄溟文選』のことを指している。この手紙の文面から、惺窩が李の文章に対してある程度の興味を持っていることが読み取れる。さらに、惺窩は羅山宛ての手紙で「左逸終精覽、珍重一篇之品評。吾邦又不為無一鳳洲。文已然、道学豈不然乎、況道外無文、文外無道。足下立志已如此、彼鳳洲者不足多焉⁽¹⁵⁾」と述べている。すでに指摘されているように、惺窩は「文」と「道」とを一致させる理学の文学觀からは王鳳洲（王世貞）の文章を必ずしも評価しなかったが、「文」の視点からはその文章を評価している⁽¹⁶⁾。それでは、羅山は李・王に対してどのように考えているのか。彼は青年のころすでに、明代古文辞派の文章について「世之議之者謂佶屈聱牙、不為句讀……⁽¹⁷⁾」と述べている。その考えは晩年に至っても変わらなかった⁽¹⁸⁾。

惺窩と羅山は李・王の文章に言及しているが、彼らの詩あるいは李攀龍が編纂したとされる『唐詩選』については論じていない。だが、惺窩の弟子であると同時に羅山と師友の契りを結んで羅山の推薦によって徳川頼宣に仕えて和歌山藩の藩儒になった永田善斎（一五九六—一六六四）は、その『膾余雜錄⁽¹⁹⁾』において、『唐詩選』のみならず『七子詩集』『白雪樓詩集』『滄溟集』にもふれている。しかも、その本の中でいわゆる後期明代古文辞派の「七子」の出自などを説明し、『唐詩選』の唐詩解釈を「好的当」だと評価している。彼は江戸初期の和歌山藩の書庫を管理しており、林羅山と同じく輸入され

た多くの漢籍に接する機会があったので、右のように明代古文辞派関係の著作を数多く読んだのであろう。とはいえ、『膾余雜錄』はこうして日ごろに読んだ和漢の書籍の語句を摘出、記載して簡単に感想を述べたノートであるから、彼が李王の詩文集と『唐詩選』に言及していても、特に李王の文学主張にコミットしているわけではないことに注意せねばならない。なお、永田善斎と同じく和歌山藩に勤めていた那波活所（一五九五—一六四八）も、「李滄溟著唐詩選甚愜素心、学詩舎之何適哉」（『活所備忘録』卷二）と、唐詩を学ぶための最適の選集として『唐詩選』を賞賛していたし、明代古文辞派の詩に明確に言及している⁽²⁰⁾。

しかし、右の永田善斎と那波活所がどのバージョンの『唐詩選』を読んだかは実は不明である。それに対して、彼らの次の世代にあたる貝原益軒（一六三〇—一七一一）は「集詩者甚多、独李攀龍之所輯唐詩選最佳……且其訓解亦頗精詳⁽²¹⁾」と、『唐詩選』を推奨している。そして、引用文には「訓解」という表現が使われたし、彼の作だとされる『初学詩法』の「考用書目⁽²²⁾」では『唐詩訓解』が挙げられているので、『唐詩訓解』を使っていたと推測できる。また、元禄期前後に活躍していた鳥山芝軒（一六五五—一七一五）も『唐詩訓解』を一つの唐詩学習の教材として使っていた⁽²³⁾。そのほかに、木下順庵門下の新井白石らも『唐詩訓解』を唐詩学習のテキストとして薦めている⁽²⁴⁾。さらに、『護園雜話』によれば、徂徠自身も南総にいた頃、『唐詩訓解』を抄写し、「此南総之旧物、後足見予之所以勤也⁽²⁵⁾」と述べている。また、徂徠は「数十年前、宿学老儒、尊信三体詩・古文真宝至於四子五経並矣。殊不知周弼一無名男子、林以正書賈也。近来漸覺其非、而以唐詩訓解代之⁽²⁶⁾」と述べている。このように、前節で検討した出版史の事実と平行して、寛文ごろから出回り始めた『唐詩訓解』は、確かに儒者、文人の間で次第に流行していった。だが、同文の中で徂徠は「于鱗豈有訓解哉」と、『唐詩訓解』が李攀龍に偽託されたものだと、はっきり判定して退けた。このように、彼は宋元ないし五山の学問と繋がる『三体詩』だけではなく、明代後期に制作された粗雑な版本までを退けようとした。この徂徠の学問姿勢は、彼の『唐後詩』と服部南郭の『唐詩選』の校訂に繋がるものと思われる（後述）。

ともかく、李の編纂だとされる『唐詩選』の流行は、徂徠が唱えた以前すでに始まっていた。特に、木下門下の儒者は徂徠学派の人と同じく、明代古文辞派の盛唐詩を理想としてその詩論にコミットしている。²⁷この点については、徂徠自身は、「有錦里夫子者出、而博桑之詩皆唐矣」（卷八「叙江若水詩」）と述べている。確かに、木門の白石は徂徠に少し先立って李王の詩論にコミットして、元禄十五年に書いた『室新詩評』²⁸で、初盛唐詩を学ぶことを薦めているのみならず、「明の七子より以来は殊の外、声律にも心をを用候と相見候。唐詩訓解の中拗体此事を論し申候処に相見へ候へき」と述べている。彼は『唐詩訓解』を通して、明代古文辞派の七子が「声律」を重んじることを知り、そのような考えに与している。さらに、しばしば指摘されてきたように、白石だけではなく、同じく木門の後進たる祇園南海は享保六年に書いた『明詩俚評』²⁹の序文で漢唐詩を学ぶ階梯としての明詩（以下、明詩階梯論とする）を推している。こうした明詩階梯論は白石と南海のものだけではなく、『明詩俚評』の序文を書いた新井白蛾とその書の跋文を書いた穂積以貫にも共有されている。そのみならず、徂徠の『唐後詩』以前に出版された『明詩大観』の序文を書いた仁斎学派の香川修徳は正徳四年ごろ、「詩至乎唐而極焉。不必言矣。唯明而後可庶幾也……優入唐域者莫滄溟如也」と述べている。さらにさかのぼって見れば、同じく木門に所属する柳川震澤という、李・王の書を愛読してその主張に明確に与した人物もいた。³⁰また、松永尺五の門下生たる滝川昌榮は、貞享二年に出版された『皇明千家詩』の序文で「明儒為詩学之捷徑」とも述べている。³¹

右のように、盛唐詩重視の考えと明詩階梯論とは、徂徠が古文辞学を唱える前からすでに存在していた。特に、朝鮮通信使たちが心から賞賛してその詩を「有盛唐人口氣」³²と評した新井白石はその先駆けとも言える。ただし、白石の明代古文辞派への接近は次の二点で徂徠と決定的に異なっている。まず、白石は単に詩に限って、「声律」を重んじる明代古文辞派の詩論にコミットしたにすぎない。それに対して、徂徠は詩論だけでなく李王の文章論にも与している。しかも、後述のように、徂徠は「声律」の点だけで李・王の詩論を評価したのではない。もう一つは、白石は明代古文辞派の詩を学ぶべきだと考えて、『唐詩訓解』をも教材として使っていたが、彼は必ずしも宋詩を排除したのではない。³³それに対して、徂徠は明確

に宋詩を批判して、『唐詩訓解』をも偽書として退けた。こうしたことが可能になったのも、徂徠が李王の文学主張のエッセンスを把握していたからである。次に、徂徠はなぜ李・王の詩文にコミットしたか、ということを検討する。

二 李・王の詩文を研究する契機とその詩文選集の編纂および出版

通説によると、徂徠が三十九、四十歳頃、ある破産した蔵書家から購入した書物の中に李攀龍と王世貞の文集などがあり、それをきっかけとして「古文辞」を学び始めたことになっている。⁽³⁴⁾ 確かに、徂徠の蔵書内容を教えてくれる『護園蔵書目録』⁽³⁵⁾には、『觚不觚録』『李空同集』『李滄溟集』『滄溟文選狐白』『四部稿』『唐詩選』『尺牘清裁』『七才子詩』『世説新語補』『弁洲史粹（料の誤写——筆者）』『七名公尺牘』などの明代古文辞派関係の書籍が収蔵されている。ただし、彼がいつからこれらの明代古文辞派関係の書物を読み始めたかは定かではない。彼が十代ごろ読んだ『史記評林』『前漢書評林』にはすでに王世貞と李攀龍らの古文辞派の文学に対する見解が掲載されているし、⁽³⁶⁾ 既述のように、二十代ごろすでに『唐詩訓解』を抄写している。この意味で、彼は、明確に「古文辞学」を唱えた以前すでに李攀龍と王世貞の名を知っており、李・王の文学に対する見解がある程度理解していたはずである。ただし、通説が言うように、徂徠は四十歳ごろから明代古文辞派のものを本格的に研究し始めたと思われる。それ以後、彼は『詩題苑』『柏梁余材』（佚失）『唐後詩』『絶句解』『絶句解拾遺』『四家雋』『古文矩』などの明代古文辞派関係の著作を著した。⁽³⁷⁾ 結局、一部の『唐後詩』以外、他のいずれも、徂徠自身によって出版されなかった。以下、徂徠が四十代ごろから、どのように李・王の詩文に対する注釈・編纂に力を入れていたかを考察する前に、李・王の詩文を研究しようとした問題意識について検討してみる。

1 李・王の詩文を研究する契機——「復古」の志・「和訓」

徂徠が五十歳の時、「不佞茂卿自少小修文章之業、慨然有志乎復古。於是昭曠遠覽乎千歲、唯明李于鱗先生王元美先生則殆庶乎哉」（『徂徠集』卷二十五「與佐子巖」）と回顧して述べている。この文によれば、彼を李・王の文学主張へのコミットメントに導いたのは幼いころからの「文章の業」における「復古」の「志」である。彼がいつからそういう志を抱いたかは不明であるが、「文章の業」だと強調していたように、ここで彼が復帰したがっている古とは、かつて「文章の業」が隆盛していた日本の古である。この点については、彼が四十三歳の時に書いた「叙江若水詩」で、次のように述べている。

嘗窃揚推詩所繇隆降論其世、則寧平之際於斯為盛。……野篁・藤常嗣之倫皆颯颯乎治世音哉。

この引用文の最初のところで徂徠が「嘗て」と言っているように、この文を書く以前、彼はすでに、野篁（小野篁八〇二―八五二）・藤常嗣（藤原常嗣八〇六―八四〇）などの詩人が活躍していた寧平の際（奈良、平安初期）を回帰すべき「古」とする考えを持っていた。

しかし、徂徠にとって、「寧平之際」に回帰すべきだというのは、その時代が単に平和で詩文が隆盛していたからというだけではない。彼は「題唐後詩総論後」で、「其在寧平之際乎、如鼂衡（阿倍仲麻呂―筆者）・藤万里（藤原万里―筆者）・常嗣・野篁廁諸唐人難可辨識。暨乎、皇華不航、而人不識華音。読書作詩、一唯和訓是憑」と述べている。ここでは、寧平の際の詩人が作った詩は和訓の弊害を蒙っておらず、唐代中国詩人の詩と区別できないほど和習のないものだと言われている。徂徠が抱いた「復古」の志は、日本人が盛世に相應する「和習」のない詩文を再び作れるようになるための志でもある。彼が盛唐詩と秦漢以前の文を重んじる李・王の詩文論に共鳴を覚えたのも、李・王の詩文論が単なる復古の詩論であるにとどまらず、そこには日本人が漢詩文を作成する際に直面する和訓の弊害を克服する方法としての可能性が潜んでいるからである。つまり、徂徠が三十代ごろに提出した和訓を克服しようとした「訳文の学」の延長線に、李・王の詩文論に新たな意味を発見して「古文辞学」を提出したのだと考えられる³⁸。しかし、単に「和習」のような問題を克服するためなら、古文辞でなくても、『訳文示蒙』で挙げた『朱子語類』ないし韓柳の古文及び『三体詩』に重んじられた晚唐詩を模倣・習熟

すればよいではないか。にもかかわらず、あえて盛唐詩と秦漢以前の「古文辞」を学ぶ対象とした理由は何であろうか。この問題は次節で検討する。その前に徂徠がいかに李・王の詩文選集の編纂と出版に力を入れていたかを考察する。

2 李・王の詩文選集の編纂と出版(一)——文集

徂徠は『四家雋』『古文矩』との二つの明代古文辞派の文章を収録した文集を編纂した。二書とも彼の死後に宇佐美瀧水によって校正、出版されたものである。『四家雋』と比べれば、『古文矩』は李攀龍が書いた「序」という文体の文章しか取らない。『古文矩』はいっ書かれたかは不明である。³⁹⁾しかし、瀧水が「吾党之士欲学古文辞者当先读四家雋、欲通四家雋者、当先读此書」(『古文矩』序)と述べているように、古文辞学の入門書として出版されたものである。

次に、『護園雑話』によると、『四家雋』はもともと「漢後文」と名づけられたそうである。⁴⁰⁾徂徠が五十五歳に書いた「與佐子巖四書」で「不佞亦選唐後詩、漢後文若干卷。其唐後詩庚集辛集既付剗削」(徂徠集卷二十五)と述べているように、『漢後文』を『唐後詩』と同じように出版しようとした。おそらく徂徠がこの時に「四家雋例六則」を書いたと思われる。⁴¹⁾

が、それは徂徠の生前に出版されることがなかった。その原因として考えられるのは、おそらく後述する『唐後詩』の場合と同じく、まずは経費の問題であり、さらに、当時の徂徠が専ら「道」の解明に關する經学解釈の仕事に力を傾注していたこともあるだろう。いずれにせよ、「四家雋例六則」によれば、彼が『四家雋』を編纂・出版しようとした理由は、「蒙学」(学問の初心者)のために新たな「作文之規矩準繩」を示して、「六經十三家」⁴²⁾といった「古文辞」を読む基礎学力を得る入門書を提供して、これまで日本に流行っていた『文章軌範』『文章正宗』『唐宋八大家』などの「宋調」的な文章選集(「宋文」)を退け、「修辞」が施された「古文辞」を重視する新しい文章觀の基準を作るためである。この点については後に再論する。

3 李・王の詩文選集の編纂と出版(二)——詩集

明代古文辞派の詩に関して、徂徠の名義で『唐後詩』『絶句解』『絶句解拾遺』『詩題苑』が出版された。しかし、上に挙げた諸書は、『詩題苑』を除き、内容的に重なっている。まず、『詩題苑』については、南郭は「一時戯作、亦小兒弃物爾、不必当弘行者」とコメントしたが、徂徠の著作としている。次に、徂徠が四十六歳の時に書かれた山県周南宛の書信には、「予間者又為鬚生苦唐詩選大寥寥、不足以廣其思。故手汰二公近體若干首、一取其合盛唐者、略加箋釈、行將問梓」とある(徂徠集卷二十一、與県次公三)。とすると、少なくともその時から彼は明代古文辞派の詩選集の編纂に着手していたと言える。が、『徂徠集稿』によると、徂徠が同じ年に出した「與県次公四」で、「文野及唐詩典刑即選王李詩者、以予小築殺俸不少故不能刊也」と、牛込で家を新築して、俸禄が多く使われたので刊行できなかったとの旨を述べている。また、この手紙によると、彼はこの詩選集を『唐詩典刑』と名づけ、「王李詩」を選んだことがわかる。この『唐詩典刑』は後に出版された『唐後詩』『絶句解』『絶句解拾遺』の原型だと考えられる。

徂徠が五十五歳の時に、『唐後詩』の一部分がはじめて注釈と例言抜き形で出版された。そして、『絶句解拾遺考証』⁽⁴⁵⁾での宇佐美瀧水の序文によると、『唐詩典刑』は徂徠自身が「箋釈」を加え「例言」を付したものであるのに対して、出版された『唐後詩』は「箋釈」「例言」の付されていないものである。さらに、彼の死後に出版された『絶句解』は、『唐後詩』のベースになっている徂徠自身が選んだ「五言絶句」「滄溟七言絶句解」の一部分を削除して、「箋釈」が付いた形で出版されたものであり、『絶句解拾遺』は門人たちが徂徠自身によって削除された「五言絶句」「滄溟七言絶句解」の部分を集めて、『唐詩典刑』にもあった「兪州七言絶句解」をつけて作られたものだという⁽⁴⁶⁾。ともあれ、彼自身の手によって出版されたものは『唐後詩』の一部分だけである。しかし、荻生金谷によれば、『絶句解』に収録された「七絶」の部分は、実は徂徠が火災に罹って焼失されたものを書き直したものだ⁽⁴⁷⁾という。この火災とはおそらく、彼が五十八歳の時(一七二三年)に牛込の宅が類焼されたことを指している⁽⁴⁸⁾。だとすると、彼が晩年にいたっても明代古文辞派の詩集の注釈・編纂に勤めてい

たことが窺えよう。

しかし、なぜ徂徠は晩年まで、これらの詩集を注釈・編纂ないし出版しようとしたのか。この点についてはまた後述するが、「題唐後詩総論後」によれば、五山僧侶及び彼の同時代の儒者を魅惑した晩唐、宋的な詩風を中心にした『三体詩』『瀛奎髓律』『詩格』『錦繡段』などの詩文選集を退け、盛唐的な詩風を中心にした「明詩」を彼が編纂、出版することによって、盛唐詩がこの百年足らずのうちに明代で再現されたことを紹介するためである。この意図の中には、盛唐の気象も徳川日本において再現可能だという希望をも込められている⁽⁴⁹⁾。

このように、徂徠の李・王の作品を中心にして行った詩文選集の注釈と編纂作業には、これまで支配的だった訓詁的な思惟による「宋調」(後述)的文学のスタイルを批判ないし改革しようとした意図が込められていたと言えよう。次に、さらに彼の詩文論を詳しく検討して、なぜ彼が宋的な詩文を批判して、李・王の詩文論にコミットしてパラダイムの転換を図ろうとしたのかを考えてみよう。

三 徂徠の「古文辞学」と李・王(一)——宋文批判とその文章論

『徂翁雜抄』⁽⁵⁰⁾には、部分的であるが、李の文集に関する読書ノートともいうべきものがある。その中には次のような一文がある。

「二三君子」豈兼指茅鹿門輩邪、「治牘成一説」指制義、「俚言而布在方策」指宋儒語録近思録類。

茅鹿門(茅坤)とは『唐宋八大家文抄』の編纂者であり、「制義」とは科挙で八股文を使って理学の経義を書くことを意味している。このように、徂徠は、李の議論を唐宋古文ないしそれを基礎にしている八股文に対する異議の申し立てとして理解している。それをノートに記述したように、そういう考えから何かを感じ取ったようである。徂徠がメモした原文は次

のようにである。

今之文章、如晋江、毘陵二三君子、豈不亦家傳戶誦。而持論太過、動傷氣格、憚於修辭、理勝相掩。……世之儒者、苟治牘成一説、不憚儕俗、比之俚言而布在方策耳。⁽⁵¹⁾

この文は李攀龍が唐宋古文を尊ぶ晋江（王慎中）、毘陵（唐順之）といった唐宋派の文章ないし唐宋古文そのものが文章の形式に関わる「氣格」と「修辭」よりも「理」を重視して「俗」に捉われたことに対して批判した有名な一文である。

王世貞も「今之為辭者、辭不勝跳而匿諸理」⁽⁵²⁾「而一時輕侮之士、樂於宋之易構而名易獵」⁽⁵³⁾と言っているように、「氣格」「修辭」よりも「理」を重んじる宋文を問題視している。こうした見方は明代古文辞派の共通認識とも言える。注意したいのは、この李の批判には、「和訓」で「理の高妙を説」⁽⁵⁴⁾く徳川前期儒者に対する徂徠の批判と、問題意識として重なるところがあることである。つまり、李・王と徂徠は同じく、「理」を重んじ時代の習俗に捉われて学びやすい方を選ぶという考えに対して、批判的な立場を取っている。しかも、徂徠が『訳文示蒙』「総論」で述べた、「字義」「文理」を理解する文章の模範とした「朱子の文」と文章の技法を磨く模範とした韓柳の古文とは、右の李の批判の中ですでに言及されている。このように、徂徠は李の唐宋古文への批判に導かれて、かつて学んでいた唐宋古文、特に朱子学者らの文章ばかりを模倣しても、「和訓」の弊害が克服できず同じく俚俗的な漢詩文しか書けない、という問題に気づいたのである。この点を以下でさらに詳論したい。

徂徠は、その「古文辞学」を提出した『訳文筌蹄初編』「題言」において、「和訓」で漢籍を読むことと「欧會」の文章（「宋文」）だけを学ぶことは同じ病氣だと明言している。この病氣とその治療法に関連して、後年の徂徠は、自分が李・王に与した理由を次のように説明している（徂徠集卷二十七、答屈景山一）。

夫華言之可訳者、意耳。意之可言者、理耳。其文采粲然者不可得而訳矣。故宋文之與俚言倭言、其冗長脆弱之相肖。必従事古文辞、而後可医倭人之疾。

つまり、「倭人」にとって、「宋文」は「冗長脆弱の相」を持ち、「理」の理解を重んじる文体であるから、同じく「理」の理解に重きを置く「和訓」の限界を理解するには困難だし、「修辭」が施された「文采粲然たる」詩文のニュアンスまでを捉えることができない。このように、徂徠は李・王の議論に触発され、和訓だけではなく、当時の知識人が学んでいた唐宋古文、とくに「宋文」の問題点を意識して、それを批判するようになったと考えられる。

「宋文」はとくに問題だという徂徠の考えは彼の漢文史観と関わっている。徂徠は「六経辞也、法具在焉。……降至六朝辞弊而法病、韓柳倡古文一取法於古。其細辞者、矯六朝之習也。……李王二公倡古文辞亦取法於古。其謂之古文辞者尚辞也、主叙事不喜議論。亦矯宋弊也」(同上、答屈景山一)と述べている。唐代の古文大家である韓愈と柳宗元は古文辞派の李・王と同じく、「古」に「法」を取る。こうした「古」に「法」を取る学問姿勢は徂徠が韓・柳を評価したところである。また、徂徠が『説文筌蹄初編』「題言」「第十則」で「達意」と「修辭」をめぐって展開した漢文史論でも、韓・柳が過度に「修辭」を重んじた六朝文学の弊害を正して、「修辭」と「達意」がともに重んじられた「三代」の「古」に求めて、「達意」を強調して古文を復興したことを評価している。しかし、その一方で徂徠は、「孟子時、礼楽之化漸漓、其辞質勝、是為変調。韓祖孟子、務去陳言、故貶左氏為浮誇。……宋儒皆韓奴隸」(卷二十四、復水神童二)と「要之昌黎好議論務言理、其風至宋益盛」(卷二十八、復安澹泊三)と述べている。つまり、彼から見れば、韓愈が復興した「古」とは、主として『孟子』のような「理」を説く議論文である。また、韓愈が古代の叙事文たる『左伝』を「浮誇」と評したことや、「陳言を去る」と主張したことなどは、「古文辞」が重視されなかったきっかけになっているという。徂徠は、『左伝』など古代の「修辭」を重んじる叙事文の伝統が韓愈の影響によって衰えたことが問題だと見ている。そうであるから、彼は『説文筌蹄初編』「題言」「第十則」で、韓愈以後、その文章自体が宋代の「欧・蘇」(欧陽修と蘇軾)などの古文家に模範とされたいゆえに、古代の「修辭」を重んじる叙事文の伝統はさらに衰退し、元明になると俚俗な「語録」の用語が文になり、「助字」の用法が古書と異なるようになった、と主張している。このように、徂徠は複眼的に漢文の発展史上における韓・柳の

功罪を捉えている。

ところで、徂徠の漢文史観と明代古文辞派の文章観とを比べたとき、そこにはどのような異同があるのか。『明史』によれば、明代古文辞派は文章において「文必秦漢」を唱えていたが、実は必ずしもそうではない。⁵⁵ まず、明代古文辞派といっても人によってさまざまな異なる考えがある。ここでは検討する余裕がないが、李・王に限って言うと、後に徂徠も指摘するように、このテーゼは少なくとも王世貞にはあてはまらない。また、王は「辞」より「理」を重んじる宋文を批判したが、韓・柳の文について、『左伝』など秦漢以前の文と同じく「熟読涵泳」すべき文だと言っている（『藝苑卮言』、卷一⁵⁶）。なお、彼は『藝苑卮言』「毛穎伝」尚規子長之法」（卷四）において、「文至隋唐而靡極矣。韓柳振之曰斂華而実也。至於五代而冗極矣。欧蘇振之曰化腐而新也。然欧蘇則有間焉。其流也、使人畏難而好易」（同上、卷四）と評している。さらに、その一方で、何景明がいう「文靡於隋、韓力振之、然古文之法忘於韓」（同上、卷二）を引用し、「西京之文実、東京之文弱猶未離実也。六朝之文離実也。唐之文庸猶未離浮也。宋之文離浮矣。愈下矣。元無文」（卷三）といった文章史観を述べている。右に引用した王が『藝苑卮言』で示した文論から、六朝の美文主義を修正するために古文運動を起こして『史記』などの秦漢古文に復帰しようとした韓愈を、中国文章史における転回点だとする見方が、明確に読み取れる。右の徂徠の漢文史観はかなりの程度、この王の見方を踏まえていると思われる。ただし、徂徠は王より簡潔に「達意」と「修辭」及び「議論」と「叙事」という対概念で漢文の史的展開を把握している。とはいうものの、王世貞の文論にはすでに、「孔子曰辭達而已矣。又曰脩辭立其誠。盖辞無所不修而意則主於達」（『藝苑卮言』、卷一）といった「修辭」と「達意」という対概念に繋がる考え、及び「尚法」と「達意」とを対立的に捉えた論法（四部稿卷五十六、五嶽山房文稿）などが見られる。これらの考えはやはり、徂徠の文論の構築にとって重要な示唆を与えたと思われる。さらに言うと、王世貞には「不佞自少時好讀古文章家言、竊以為西京而前談理者推孟子」（弇州統稿卷四十二、念初堂集序⁵⁷）というように、孟子の文を「理」を論じる議論の模範だという考えがある。また、ほかの明代の文論書にも、「退之本孟子」（『文章弁体』序説⁵⁸）という考えが現われ

ていた。徂徠はこれらの見方を踏まえて、さらにその「道」を中心にした歴史観⁵⁹と対応するように、「理」と「議論」を重んじる孟子から韓・柳、欧・蘇、理学者の語録に至る文章の墮落史観ともいうべき系譜を考え出した。この二点は徂徠が李・王らの文論に依拠しながら発展してきた見方といえよう。

しかも、徂徠は右の漢文史観を踏まえて、徳川日本の文学状況に即して、「中国人学韓柳則為歐蘇、此方人学韓柳則僅為歐蘇之奴隸、況於其学歐會者乎」（『訳文筌蹄初編』「題言」第十則）と述べ、特に「歐會」の文（「宋文」）を専ら学ぶ対象とする徳川の儒者らを批判している。この徂徠の議論の論法は、「正如韓・柳之文、何有不從左史來者。彼学而成、為韓為柳。我卻又從韓・柳学、便落一塵矣」という王世貞の弟である王世懋の『藝圃擷餘⁶⁰』にある議論と似ている。それは徂徠に何かのヒントを与えたかもしれない。ともかく、この批判は実際、おもに伊藤仁斎を念頭においていたのではないかと思われる。周知のように、徂徠は『護園隨筆』に付録された『文戒』で伊藤仁斎の文章の和習を摘出して戒めた。が、それのみならず、『隨筆』においては、徂徠は次のように述べている。

仁斎所称述王遵巖・歸震川皆小家数、何足数哉。況此方学者、率鮮有深遠含蓄之思、盛大雄偉之氣象、故其文皆冗長疎弱是為通弊。若以欧會諸家為準、辟則揚薪救火、愈見其甚已（一四六頁）。

ここで仁斎はまさに、王遵巖・歸震川といった唐宋派、さらに唐宋派が尊ぶ「欧會」の文章法を学んだ人であるとされている。しかし、徂徠の批判対象は、もとより仁斎に限らず、「冗長疎弱」という「通弊」をもつ当時の儒者、文人らの文章全体であったはずである。つまり、徂徠は、日本における「文章大業」を復興するという「復古」の志を達成するために、「和訓」に頼って「宋文」を模範とした彼以前ないし同時代の儒者・文人が漢文を学ぶ方法を批判して、「理」よりも「辞」「気格」を重んじる李・王の文章観にコミットしているのである。

しかし、李・王二人の文章の間にも差異がある⁶¹。徂徠に言わせれば、その差異の一つは「滄溟全不用韓柳法、弇州非不用之、迺修辭以勝之」（卷十九、四家雋六則）ということである。ここで、徂徠が『四家雋』を編纂したように、韓・柳を批判

しながらも彼らを文章の模範にした王世貞の漢文観を継承したとも言えよう。そして、明代古文辞の詩文論に対する徂徠のコミットをめぐつて、彼の弟子たちないし後世の文論家を最も戸惑わせたのは、彼が王より難読の李の文章を殊に鼓吹したことである⁽⁶²⁾。彼の『古文矩』が専ら李の文章を選んだところからも、彼の李の文章への愛着が窺える。さらに、彼は自らの学問宣言とも言える『学則』を「李于鱗体」と呼んだ⁽⁶³⁾ように、李の文体は彼にとって特別な意味を持っている。そして、徂徠が殊に李の擬古文辞に感心したのは、決して単に秦漢以前の「古文辞」を剽窃・模倣するという表面的な作文技法に對してではない。彼が注目したのはむしろ、叙事文を中心にした「古文辞」の「辞」及び「援古辞証以今事」といった作者の含蓄した「意」を表現できる叙事文の修辞技法⁽⁶⁴⁾や、仮借字を使って文章の「声韻」を調和させる修辞技法などによって「雅」になった文章ないしその文章に現れた燦然とした「高華」な「色」「気格」などである⁽⁶⁵⁾。十分に論ずる余裕がないが、徂徠にとつて、李・王の文章と秦漢以前の叙事文は、次に検討する盛唐詩と同じく、「宋調」的な仁斎らの文章が持たない「深遠含蓄の思」と「盛大雄偉の氣象」をもっている点で、模範として学ぶ対象になるべき文章なのである。ここで注意したいのは、今指摘した点が実は詩論の問題と絡まっていることである。そこで次に、詩論の検討に入る。

四 徂徠の「古文辞学」と李・王(二)——宋詩批判と詩論

徂徠は「題言」と近い時期に書いた「答崎陽田辺生」(徂徠集卷二十五)で次のように述べている。

詩原三百篇。……辟如春風吹物、草木燁然著花……六朝至唐皆其(三百篇——筆者)流風。独宋時學問大闡、人々皆尚聰明以自高、因厭主情者之似癡、遂更為伶利語。雖詩實文也。蘇公輩為其魁首、餘波所及明袁中郎、錢蒙叟以之、胡元瑞所謂衰莫衰乎宋者是也。是又不它故也。主意故也。今觀此方詩、多類宋者、亦主意故也。……(和訓批判——筆者)……至於情、其名雖七、而態度種種不可言尽、唯語之氣格・風調・色沢・神理、庶幾可以發而出之。以此觀之得意而不得語者之不

能尽夫情也。審矣。故予断以為学詩之法必主情而求之語是已。

この長い引用文はよく徂徠の詩観を表現している。その主旨を簡潔に述べれば次のようになる。彼は「唐後詩」「唐後詩総論」にも引用された胡元瑞などの明代古文辞派の詩論を踏まえながら、「意」を重んじる宋詩と晩明の詩と徳川前期儒者たちの詩をいずれも批判している。それに対して、さまざまな「情」を表現しえる「語」(「辞」⁶⁶)を重んじる盛唐以前の詩及び明代古文辞派の詩を評価している。彼が評価したのは、これらの詩の「語」が「気格・風調・色沢・神理」を持ち、それを通して詩に含蓄された「情」が把握できるからである。このように、この徂徠の詩論の主旨と右に述べた文論の主旨とは同じく、日本の儒者文人が「意」(理)を重んじる詩文だけを模範として学ぶのでは、和訓を克服することはできず、翻訳しえない漢詩文の「語」(「辞」)がもつ「気格・風調・色沢・神理」を感得しさらにそこに含蓄された「情」を理解できない、ということを強調している。

右の徂徠の詩論は、李・王の詩論と同じく、いわゆる「格調説」だとされている⁶⁷。それは普通、句法などの形式美を重んじて「声律」に拘る詩説だという風に捉えられがちであるが、明代古文辞派と徂徠に批判された宋詩も「声律」を重視しないと言えないように、「声律」を重んじることと「格調」を重んじることとは必ずしも等しいとは言えない⁶⁸。そもそも、「格調」あるいは「格」と「調」はあいまいで捉えにくい概念であり、人によって解釈が微妙に異なる。「格調」に関しては、鈴木虎雄が指摘したように、格調説を貴ぶ人は詩の外面的形式(「格」・声律(「調」)を正すのみならず、含蓄された詩の「意」(「気」「情」…)をも重視し、そうした詩の内面の精神が外面の「格調」に相応することを望んでいる⁶⁹。すなわち、彼らが貴ぶ「格調」とは単なる詩の外面の形式美を指すにとどまらず、詩の内面に含蓄された「意」(気、情…)にも関わる詩学概念として明代古文辞派の詩人たちは理解しているようである。なお、鈴木虎雄も言及しているように、格調説には、「声」のほかに「色」「味」といった位相も存在する⁷⁰。

右の点については、「格調」説の起源だとされた明代前期の李東陽も「詩必具眼、亦必有具耳。眼主格、耳主声⁷¹」と述

べている。⁽⁷²⁾ 王世貞も「声調於耳、色調於目」(四部稿卷六十七、李氏在筭存稿)と述べている。この李東陽と王世貞との考え、さらに右の鈴木虎雄の説明を加えて考えると、「格調」は、まず、詩の体格と平仄韻律など「声」の抑揚・軽重などを調和させる句法、字法と詩に使われた辞に現れた「色」「味」、及びそれによって含蓄された「意」に関わる。さらに、王世貞は「才生思、思生調、調生格。……格即調之界」(『芸苑卮言』卷一)と述べているように、「調」の差異によって「格」の差異が生じた。ただし、「格」には少なくとも、詩の形式としての体格と「調」によって生じた品格との二つの意味を持っている。すなわち、「格」は詩の体格として、詩の「調」を制限していると同時に、詩の「調」によって作り出した品格の意味を持っている。そして、「調」という言葉もすくなくとも、「声調」と詩の「味」に関わる風致、風韻としての「風調」との二つの意味を持っている。⁽⁷³⁾ そこで、王は「調者、氣之規、……今子能抑才以就格、完氣以成調、幾於純矣」(四部稿卷四十、沈嘉則詩選序)と述べているように、体格としての「格」にあわせて「調」を完成させるためには「氣」の役割が重要だと考えている。「氣」はさらなる捉えにくい概念であるが、「氣」は詩を詠む時の語氣として、右の「調」に関わる。「因情以發氣、因氣以為声⁽⁷⁴⁾」と言われるように、「氣」は詩を詠む時の「情」と、「声」を結びつける媒介で、音韻の抑揚頓挫だと捉えられているようである。しかし、「氣」は「声調」に関わるほかに、「氣象」という詩学概念があるように、詩がもつ含蓄的な意味に関わっている。「氣象」は詩の「声律」と詩に使われた「辞」の「色」と詩全体がもつ「味」によって興って読者たちに感じ取られる氣勢と言外の韻致などと捉えられる。このように理解すれば、「格」あるいは「氣格」「風格」は詩の「氣象」によって現れた品格として捉えられよう。例えば、王の文集には「不失初唐氣格」(『芸苑卮言』卷四)、「情景妙合、風格自上」(同上)とある。そして「風格高邈鴻麗」(続稿卷四十一)とあるように、よい「風格」の詩はおのずから「麗」しいな「色」を持っているとも捉えられよう。それに対して、「李有風調而不甚麗」(『芸苑卮言』四)「風調翩翩出蹊徑外」(続稿卷一百五十七)とあるように、「風調」は「色」よりも、法則に捉われていない韻致、神韻に繋がる概念として理解されているようである。

右のように、「格調」は、体格、声調といった外面形式の意味のほかに、詩がもつ「声」「色」「味」によって表現された「気象」と作者が表現しようとした含蓄的な意味（意象）、ないし詩の「気象」によって現れた詩の品格としての「気格」「風格」と詩の韻致としての「風調」までも含意する概念として、捉えられている。そこで、徂徠にも信用された胡元瑞がいう「体格・声調」と区別された「興象風神」⁷⁶とも関連させて考えれば、徂徠がいう「気格・風調・色沢・神理」は、体格と声律の分析だけで捉えきれない含蓄に富む詩の境地を形容するための概念として捉えられるべきだろう。後述のように、徂徠が特に「色沢」を挙げたのは注意すべきであろう。ともかく、個人差があるが、こうした境地は格調説の擁護者が到達しようとしたところと同じであると思われる。

ここでは、更なる細かい議論に入らないで、右の考察を踏まえ、徂徠の詩説を検討してみよう。「格調」について、徂徠は、次のように述べている。

大氏格猶人之品也、故貴高。調猶人之儀者也、故貴称。閩風蒸霞、峨眉積雪非格乎。五声相和五色相章非調乎。故格得而調不得譬諸千里之鬻蹠馬。徒取其調耳、則駑馬善馴者也。（同上、卷二十七答稻子善）

この引用文では、「格」は身分の貴賤差異の品級（品格）に、「調」は人の外見に喩えられている。そして、「調」は調和的な「声」だけを意味しているのではなく、「色」が調和しているという意味をもつことが明白に説明されている。このように「調」は「色」の位相にも関係することから、彼は「四家雋六則」で欧蘇の文を「宋調」と言っているように、声律を重んじない文章についても「調」という概念で評している。この場合、「宋調」については、明代古文辞派の「後七子」の一人だとされた謝榛が「凡多用虚字便是講、講則宋調之根」⁷⁶と言っているように、「宋調」は虚字の多用によってもたらした詩文の「色」の貧弱さを言っているようである。さらに、右の引用文では、「調」を得た詩をよく訓練されている駑馬に喩えている。徂徠にとって、よい詩は「調」を得ているだけでなく、その「格」が古く、また高くなければならない。そこで、右の引用文にある「峨眉積雪、閩風蒸霞」⁷⁷という王世貞が李攀龍の詩を評価した文に対して、徂徠が「非格乎」と言っ

ているように、彼にとって、「格」の高い詩はイメージとしては、聳えた峨眉山の山頂に雪が積もっている、あるいは崑崙山の山頂（閩風）に夕焼けが広がっているような、渾然とした氣勢をもつ詩のようである。ここでは一々例を挙げないが、「峨眉」「積雪」、「閩風」「霞」のようなイメージの壮大な実字は明代古文辞派の愛用字である。そこで、確認できるのは、「格」を「品格」として徂徠が捉えていることである。このように、彼は「格調」の「格」を単なる形式としてではなく、品格の次元で理解しているし、詩の「辞」に着目して聴覚だけではなく視覚の視点からも「格調」を捉えている。

さらに、徂徠は次のように述べている。

一啓唇斯有声調、有声調斯有格調……古聖人之言曰、溫柔敦厚詩之教也。是千万世言詩者之刀尺准繩。詩自三百以至李杜雖其調随世移体每人殊。而一種色相辟如春風吹物燁然可觀者迺為不異也（同上、卷十九題唐後詩総論後）。

この引用文によれば、まず彼は、「声」（声律）と関係で「調」を理解して、こうした意味の「調」は時代、詩の体格、詩人によって変わるものだとしながら、『詩経』の詩と盛唐詩人である李白および杜甫の詩が時代を超えて、共通的に「春風」が物を吹くような生き生きして豊富な「色相」を持っている、と捉えている。これはやはり、声律としての「調」よりも「辞」と「気格」に着目して得た発想であろう。実際、王世貞の文集には、やはり李攀龍の詩を評価したところに、「其七言歌行初甚工於辞而微傷其氣、晚節雄麗精美、縦横自如、灼然春工之妙」（芸苑卮言卷七）とある。徂徠が繰り返し述べている「春風吹物燁然可觀者」はここから来たかもしれない。これは詩の「辞」が盛大で生氣溢れる氣象をかもし出していることを言っていると思われる。このように、徂徠は右に整理した明代古文辞派の格調説を深く理解した上で、詩に使われる「辞」を重んじながら、盛大豊富な「氣象」ないしそれによって現れる「色相」などを殊に強調している。この点は彼の詩論の特徴と言えよう。右に論じてきたことを踏まえて言えば、徂徠が実字の「辞」を多用する盛唐詩と明代古文辞派の詩（特に李攀龍の詩）を好んだ理由は、詩の「声律」のほかに、特に、「声律」と「辞」に表現された「格調」「色相」を重んじるところなどにあると思われる。

結びにかえて

江戸の始めから徂徠が活躍し始めた元禄の末まで、百年ぐらいの時間が流れている。この百年の間に、明代古文辞派の著作はさまざまな形で閲読、批評、利用されてきた。そのうえで、徂徠によって決定的な意味づけがなされたのである。徂徠は明代古文辞派の詩文論をよく理解した上で、それを和訓による漢文学びの弊害を克服して優れた漢詩文を作る方法、すなわち「学」としての「古文辞学」に練り上げたのである。

そこで、右に明らかにした徂徠の詩文論としての「古文辞学」の特徴を踏まえるなら、次のように指摘できる。つまり、彼から見れば、和訓の弊害を克服するためには、「色」が貧弱で「理」の理解ばかりを重んじる「宋調」の詩文を退けねばならない。それに代わって、「色」が豊かで調和している盛唐以前の詩や、秦漢以前の「古文辞」の「辞」およびその「辞」を組み立てる「法」を、模倣し習熟することが必要である、と彼は考えた。そして彼によれば、「昭代御運、文教鬱興、而人稍稍識操唐音。然和訓読字其弊自若、唯識意義、而不諳格調体勢為何物」と述べているように、「唐音」ができるだけでは不十分である。というのも、「唐音」を会得するだけでは「和訓」の弊害を克服できず、詩の「格調」「体勢」を知ることができないからである。彼が「聴之以目」（『訳文筌蹄』「題言」）という考えを提出して、「古文辞学」を唱えたのは、漢詩文の「体勢」「格調」をも読み取るためである。中国語を母語としない日本人にも中国人より優れた詩文を作ることが可能であるという自信を彼が得たのも、「声」だけではなく「色」の視点から漢詩文のあるべき「格調」を捉える目を持つていたためであろう。彼が「修辞」を重んじて明代古文辞派の詩文論に深くコミットした理由はここにもあると、私は考えている。

最後に指摘しておきたいのは、こうした詩論と文論を武器にして、徂徠は日本における「文章の業」の復古を唱えたのみ

ならず、「文の空間」としての東アジアにおいて、「芙蓉白雪」の「色」をもつ彼ら一門の詩文によって覇を唱えようとしたのではないか、ということである。この問題と経典解釈方法としての「古文辞学」のあり方についての考察は別稿に譲り、本稿はここで筆を擱くことにする。

〔注〕

- (1) 『荻生徂徠全集』（みすず書房）に拠る。この全集に収録されている徂徠の刊行された他の著作についても、同書に拠った。なお、『徂徠集』については『近世儒家文集集成第三巻』（べりかん社、一九八五年）に拠った。
- (2) 『論語徴』などを検証すると、徂徠が使っている「古文辞」はほとんど秦漢以前の古文を指している。ただし、明代古文辞派が使っていた「古文辞」という言葉は場合によって詩と宋代の古文をも含めている（黄卓越『明永樂至嘉靖初詩文観研究』北京師範大学、二〇〇一年、十四、八十七、八十八頁を参照）。ともかく、中国文学における「古文辞」という言葉の用法に対するより詳細な考証が必要だが、これは別稿にゆずる。
- (3) このテーマに関する先行研究には、豊田穰「李・王の文学と徂徠の詩文」（漢学会雑誌第一巻第一号、一九四〇年）と、吉川幸次郎「徂徠学案」（『日本思想大系三六 荻生徂徠』岩波書店、一九七三年）、前野直彬「徂徠と中国語および中国文学」（『日本の名著一六 荻生徂徠』（中央公論社、一九七四年）、日野龍夫「徂徠学派」（筑摩書房、一九七五年）と、高橋博巳「古文辞と思想」（『宮城工業高等専門学校 研究紀要』一九号、一九八三年）と、片岡龍「十七世紀の學術思潮と荻生徂徠」（『中国——社会と文化』一六号、二〇〇一年）などがある。
- (4) 吉川幸次郎、前掲論文、六六八頁を参照。
- (5) 同上、六九七〜七一四頁を参照。
- (6) 片岡龍、前掲論文、一五七〜一六三頁を参照。
- (7) 「鳳鳥不至」（『吉川幸次郎全集 二三』岩波書店、一九七七年）、一一九、一二〇頁を参照。
- (8) 吉川幸次郎「徂徠学案」、六六六〜六六九、六九八頁を参照。
- (9) 『古今詩刪』を除いて、表二で掲載された十三種の異本には、さらに分けてみると二種類の『唐詩広選』と八種類の蔣一葵註釈本の異本があるので、合計すると、二十一の異本があることになる。
- (10) 井上進『中国出版文化史』（名古屋出版会、二〇〇二年）、第十四章を参照。
- (11) 『和刻本漢詩集成』（長沢規矩也編、汲古書院、一九七四〜一九七九年）を参照。

- (12) 『江戸時代書林出版書籍目録集成』(慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編、井上書房、一九六二—一九六四年)を参照。
- (13) 『藤原先生文集』(『藤原惺窩集』國民精神文化研究所、一九三八年)、卷十一「與林道春九」、一五一頁。
- (14) 同上、「與林道春一〇」、一五一頁。
- (15) 同上、「與林道春四」、一四九頁。
- (16) 大島晃「林羅山の「文」の意識(其之一)——「読書」と「文」」(『漢文学 解釈と研究』一号、一九九八年)、一九〇—二〇頁。
- (17) 『林羅山文集』(京都史蹟會編纂、ぺりかん社、一九一八年)卷五「示堀正意」、四五頁。
- (18) 同上、「隨筆 七」、卷七十一、八八五頁。
- (19) 東京大学総合図書館所蔵本に拠る。
- (20) 豊田穰、前掲論文、四五頁を参照。『活所備忘録』の引用文は豊田論文から転引したものである。
- (21) 『格物餘話』(『益軒全集 卷之二』益軒會編纂、一九一〇年)、三二八頁。
- (22) 『初学詩法』(『日本詩話叢書 第三卷』鳳出版、一九七二年)、一頁。
- (23) 『先哲叢談続編』(『近世文芸者伝記叢書』ゆまに書房、一九八八年)、卷四、二二五頁。
- (24) 『白石先生詩範』(『日本詩話叢書 第一卷』鳳出版、一九七二年)、二頁。
- (25) 『護園雜話』(『続日本隨筆大成 第四卷』吉川弘文館、一九八一年)、一〇四頁。
- (26) 『徂徠集』卷二十二「與平子和第二書」を参照。
- (27) 『唐詩選』の盛唐詩は全体の六六%を占めて他を圧倒している(中島敏夫『唐詩選上 中国の古典二七』学習研究社、一九八二年)、二二頁を参照。
- (28) 『室新詩評』(『新井白石全集 第六卷』国書刊行会、一九七七年)を参照。
- (29) 東京大学総合図書館所蔵本に拠る。
- (30) 『先哲叢談続編 二』、卷三、一六六頁。
- (31) 『和刻本漢詩集成 総集編第六輯』(汲古書院、一九七九年)、一六四頁。
- (32) 正徳度の朝鮮通信使である趙泰億が『白石詩草』(『新井白石全集 第五卷』)のために書いた序文を参照。
- (33) 池沢一郎「新井白石と宋詩——白石漢詩における蘇軾・唐庚・王安石の影響——」(『明治大学教養論集』三一七号、一九九九年)。
- (34) 吉川幸次郎、前掲書、六四六頁。
- (35) 静嘉堂文庫所蔵本に拠る。
- (36) 平石直昭『荻生徂徠年譜考』(平凡社、一九八四年)、三〇頁などを参照。以下、徂徠関係の事跡はこの『年譜考』に拠る。
- (37) 筆者が利用した版本については、『詩題苑』『絶句解拾遺』は服部文庫所蔵本、『唐後詩』『絶句解』『四家雋』『古文矩』は東京大学総合図書館所蔵本に拠る。

- (38) 「訳文の学」については、拙稿「徳川前期における漢文研究と翻訳—訓読と荻生徂徠の訓読批判・翻訳方法論をめぐって—」（『年報地域文化研究』一〇号、二〇〇七年）。
- (39) 南郭『物夫子著述書目』（『近世儒家文集集成第七巻 南郭先生文集』ペリかん社、一九八五年、三八〇頁を参照）には、『古文矩』が「中歳作未成者、或起端而不竟者」とされた。瀧水の『物夫子著述書目補記』には『古文矩』を「五十歳以後」の書とされている。
- (40) 『護園雑話』には「唐詩典刑」は、『唐後詩』の凡例に書れたり。『唐後詩』もとは「唐詩典刑」と云。『四家雋』を「漢後文」と云たるを、後に名を改たりとぞ」とある。
- (41) 『徂徠先生年譜考』によれば、この年に徂徠が春台に『四家雋』中の韓柳雋の校訂を頼んだ。
- (42) 「十三家」とは、『左伝』（『国語』を含める）『戦国策』『老子』『莊子』『列子』『呂氏春秋』『淮南子』『離騷』『荀子』『史記』『漢書』『文選』である。白石眞子「荻生徂徠『四家雋』に見える文論」『上智大学国文学論集』三〇号、一九九六年、注一四を参照。
- (43) 『南郭文集』「物夫子著述書目記」、三八〇頁を参照。
- (44) 『徂徠集稿』は慶応義塾図書館所蔵本に拠る。
- (45) 服部文庫所蔵本に拠る。
- (46) 原文は「曩徂徠先生欲選明詩諸體偏為之解、五七言絶句律詩選漸成、著述多端、未及終而歿。初命曰『唐詩典刑』首載例言數條、後改曰『唐後詩』而不載例言、其『五言絶句』『滄溟七言絶句解』先成、後有刪去、命曰『絶句解』、其刪去者、門人以其解之可惜也輯之、且附弁州七言絶句解摠題曰『絶句解拾遺』云」である。なお、出版された『唐後詩』の表記には「是編全部十集、歳陽為號、梨棗之費独力難支、故先刻庚辛二集、以便初学。自餘八集行嗣出、終完璧觀者、其勿以殘本崎冊視之哉」と書いてある。これに拠れば、当時、徂徠は確かにあらゆる詩のジャンルを包括した明代古文辞派の詩集を編纂・出版する計画があったが、経費の問題で、とりあえず庚・辛二集（五言絶句、七言絶句）を出版したのである。後に、丁（五言律詩）も出版されたが、それがついに完全な形で出版できなかった。そして、具体的に検証すると、瀧水が言うように、『絶句解』に収録された五言絶句一〇〇首は殆どすべて出版された『唐後詩』庚集の二〇六首五言絶句に収録され、『絶句解』に収録された李攀龍の七言絶句三〇〇首も『唐後詩』の辛集に収録された七言絶句三〇〇首と全く同じである。
- (47) 其五言絶句一百首七言絶句三百首尋為之訓詁、將循循二三子也。後罹災七絶亡則復撰補之、其甞勉不倦為是乎」（『絶句解序』）。
- (48) 『荻生徂徠年譜考』、一四四頁を参照。
- (49) 原文は「故今抄明詩、傳之寒郷学者、使藉是以識百年内外、亦有能游泳夫開元天寶盛者已」である。
- (50) 服部文庫所蔵本に拠る。
- (51) 『滄溟先生集』（包敬第校、上海古籍出版社、一九九二年）、十六卷、送王元美序を参照。
- (52) 『弁州四部稿 四庫明人文集叢刊』（以下四部稿と略、上海古籍出版社、一九九三年）、五十七卷、贈李于鱗序。
- (53) 同上、六十八卷、「古四大家摘言序」。

- (54) 『訓詁示蒙』 総論を参照。
- (55) 『明史』、二百八十六卷、「文苑二」 李夢陽を参照。
- (56) 『芸苑卮言』は、『四部稿』 一百四十七卷のバージョンに拠る。
- (57) 『弇州統稿』の引用は上海古籍出版社の四庫明人文集叢刊本による。
- (58) 東京大学東洋文化研究所蔵本に拠る。
- (59) 徂徠の道論と歴史観については、拙稿「歴史家としての荻生徂徠——中国・日本の歴史に対する認識をめぐって」(『中国—社会と文化』 二一号、二〇〇六年)。
- (60) 王世懋『藝圃擷餘』(『歴代詩話』、芸文印書館、一九九一年)、五〇〇頁を参照。
- (61) 例えば、王自身は李の文を、「意深而詞博、微苦纏擾。銘辭奇雅而寡變、記辭古峻而太塚」と批評している。(『芸苑卮言』卷七)。
- (62) 「二人(王世貞と荻生徂徠——筆者) 心酔滄溟、誤其一生、理之不可解也」(『拙堂文話評』(『日本芸林叢書 第四卷』一九二九年)、六頁を参照。なお、徂徠の弟子である太宰春台及び太宰春台の弟子である五味釜川の李攀龍文章に対する批判については、『春台先生紫芝園稿』(『近世儒家文集集成 第六卷』ペリかん社、一九八六年)、卷十「読李于鱗文」と、五味釜川『明文批評』(東京大学総合図書館蔵本) 参照。
- (63) 徂徠集卷二十三、與戴震庵四を参照。
- (64) 『徂徠集』 卷二十七、答屈景山一を参照。なお、彼は『四家雋』で、「此段援漢証今者三層」(卷三、送袁履善郎中讞獄広州序) というような評語を述べ、その修辞技法を指摘している。
- (65) 「蓋古字少、寧假借、必諧聲韻、無弗雅者」(『滄溟先生集』 卷十五「三韻類押序」) とある。また、徂徠は「于鱗於盛唐諸家外、別構高華一色、而終不離盛唐。細眎其集中、一篇一什、亦皆粹然不外斯色」(徂徠集、卷十九題唐後詩総論後) と述べている。なお、『四家雋』でも李の文を、「此篇五色燦爛奪人」(卷之三、贈王元美按察青州諸郡序) とのよう評している。
- (66) 「学詩之方、当学其辞」(徂徠集卷二十七、與竹春庵五) を参照。
- (67) 松下忠『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』(明治書院、一九七二年)、総論第六節などを参照。
- (68) 陳国球『唐詩的伝承——明代復古詩論的研究』(学生書局、一九九〇年)、三五頁を参照。
- (69) 鈴木虎雄『支那詩論史』 弘文堂、一九二八年)、一七〇—一七三頁を参照。
- (70) 同上。
- (71) 『麓堂詩話』(『歴代詩話』)、序を参照。
- (72) 「格調」という詩学概念の歴史については、陳岸峰「格調的追求——論沈德潛對明清詩學的傳承與突破」(『漢学研究』 第二十四卷第二期、二〇〇六年)、二二七—二三一頁を参照。
- (73) 陳文新『明代詩学的 進程与主要理論問題』(武漢大学出版社、二〇〇七)、二四九頁を参照。

- (74) 徐禎卿『談藝錄』（『歴代詩話』）を参照。
- (75) 『詩藪』（『全明詩話 三』 齊魯書社、二〇〇五年）、内編卷五。
- (76) 『四溟詩話』（『歴代詩話』）、卷四を参照。
- (77) 「李于鱗如峨眉積雪、閩風蒸霞、高華氣色、罕見其比」（『芸苑卮言卷五』）を参照。
- (78) 『徂徠集』卷二十一、「與泉次公四」を参照。

表1 明末清初に出版された李・王の詩文集とその詩文を収録する詩文選集(書名五十音順)

番号	書名と巻数	編著者と出版年月	備考
1	弇州山人四部稿一百七十四卷目録十二卷	王世貞撰 萬曆五年世經堂刊本	『中国古籍善本書目』(以下『古籍』と省略)によれば、一百八十巻のバージョンがある。
2	弇州山人續稿二百七卷	王世貞撰、明刊本	『古籍』による
3	弇州山人四部稿選十六卷	王世貞撰、明刊本	『古籍』によれば、二つの明刊本がある。
4	弇州山人續稿選三十八卷	王世貞撰 顧起元編、明刊本	『古籍』による。
5	弇州山人讀書後八卷	王世貞撰 陳繼儒編 明刊本(万曆年間)	同上
6	弇州先生尺牘三卷	王世貞撰、明刊本	同上
7	弇州山人文抄十二卷(八代文抄本)	王世貞撰、万曆刊本	同上
8	弇州先生五言律選四卷 七言律選八卷	王世貞撰、王忞麟編 万曆刊本	同上
9	王鳳洲集四卷	王世貞撰、明刊本	同上
10	王元美先生文選二十六卷	王世貞撰、喬時敏編、 万曆四十三年刊行本	同上
11	王弇州集二十卷	張汝瑚編、康熙二十一年 刊本	同上
12	擬古樂府二卷	李攀龍撰、明刊本	同上
13	今文選十二卷	孫鑛編、萬曆三十一年刊 本	同上
14	九大家詩選十二卷	陳茨 李昂枝輯 順治十七年刊本	同上
15	御制四朝詩	張豫章等奉勅輯 康熙四 十八年内府刊本	『李攀龍文学研究』、280 頁による。
16	皇明文則三十二卷	慎蒙編選、万曆元年刊本	同上
17	皇明文範六十八卷	張時徹編選、万曆刊本	同上、『李攀龍文学研究』 によれば、万曆三年刊本 と隆慶年間刊本がある。

徳川前期における明代古文辞派の受容と荻生徂徠の「古文辞学」

18	皇明百大家文選十七卷	楊起元編、萬曆十三年 周宗孔刊本	同上
19	皇明詩統四十二卷	李騰鵬輯 明萬曆十九年刊本	『古籍』によれば、崇禎八年の重修本もある。
20	皇明八才子文選	卜世昌編、明刊本	『李攀龍文学研究』、328頁による。内閣文庫蔵書。
21	皇明十大家文選	陸弘祚批選、明刊本	『古籍』による。
22	皇明五先生文雋二百四 卷目錄五卷	蘇文緯編、天啓四年刊本	同上
23	皇明經世文編五百四卷 同補遺四卷	陳子龍等編、崇禎年間刊	『李攀龍文学研究』、241、242頁による。
24	皇明詩選十三卷	陳子龍等編、崇禎十六年 刊本	『古籍』による。
25	國雅二十卷 國雅品一卷 續四卷	顧起綸編、萬曆元年刊本	同上
26	石倉十二代詩選八十六 卷 次集一百四十卷（明 興詩選）	曹学佺編、崇禎刊本	同上
27	刻註釈李滄溟先生文選 狐白	李攀龍撰、陽九經註釈 明刊本	同上
28	國朝七名公尺牘八卷	屠隆編、萬曆三十一刊本	同上
29	新鐫註釈釈出像皇明千 家詩四卷	汪万頃編集、周文卿刊本	同上
30	鐫翰林攷正國朝七子詩 集註解七卷（七才子詩 集）	馬象乾編、李廷機 注 萬曆二十一年序 刊	『古籍』によれば、ほかには、万曆二十二年鄭雲竹宗文書舎刊本と江一礼校注本と李士安補注本と清初還読齋刊本の明七子詩選註本がある。
31	新鐫会本湯先生批評滄 溟文選評林五卷	李攀龍撰 湯賓尹評 明 詹霖宇刊本	同上
32	盛明百家詩	俞憲 編 隆慶刊本	同上。なお、『李攀龍文学研究』によれば、原刊

			本は隆慶五年である
33	盛明十二家詩選十二卷	朱翊釗輯 萬曆三年序	『古籍』によれば、萬曆十三年刊本もある。
34	選明四大家詩集	藍庚生編選 崇禎八年刊本	同上
35	滄溟先生集三十卷付録一卷	李攀龍撰、明刊本	『古籍』によれば、十三バージョンの明刊本がある。その内には三十二巻本がある。
36	滄溟文抄九卷	李攀龍撰、万曆刊本	同上
37	續文選三十二卷	湯紹祖輯、萬曆三十年希貴堂刊本	『李攀龍文学研究』、238頁による。
38	白雪樓詩集十卷	李攀龍撰、嘉靖四十二年序魏裳刊	『古籍』によれば、ほかに三つのバージョンがある。その内には十二巻のバージョンもある。
39	八代文鈔	李賓編、明刊本	『李攀龍文学研究』、231頁による。
40	批点明詩七言律	穆文熙批選 万曆九年劉懷恕刊本	
41	補註李滄溟先生文選四卷 附一卷	宋光廷校、宋祖駿、宋祖驊補註 明刊本	『古籍』による。
42	鳳洲筆記二十四卷	王世貞撰、隆慶三年黃美中刊本	『古籍』によれば、ほかに、黃美中活字印本と清抄本がある。
43	明詩正声六十卷	盧純学編選、万曆十九年江一夔刊本	『古籍』による。
44	明詩正声十八卷	穆光胤刪定、陳素蘊批點 明萬曆刊本明萬曆四十一版	同上
45	明十二家詩選三十九卷	趙南星編 萬曆二十四年刊本	同上
46	明詩十二家十二卷	李心学編、万曆年間勞堪刊本	『古籍』によれば、ほかに、程拱宸刊本がある。
47	明文奇賞四十卷	陳仁錫輯併評、沈國元	『古籍』による。

徳川前期における明代古文辞派の受容と荻生徂徠の「古文辞学」

		校、天啓三年刊本	
48	明文齋二十卷	劉士麟輯併評、崇禎七年刊本	同上
49	明詩選十二卷首一卷	明李攀龍編、陳子龍增刪崇禎四年豹変齋刊本	同上
50	明詩選最八卷	華淑編、金陵書林李洪宇刊本	同上
51	明詩鈔九卷	彭孫貽輯、四部叢刊本	『李攀龍文学研究』、269頁による。
52	明詩評選八卷	王夫之編選	『李攀龍文学研究』、273頁による。ただし、選ばれた李・王の詩は僅少
53	明詩綜一百卷	朱彝尊輯、汪森等緝評、康熙四十四刊年本	『古籍』による。
54	藜照昌樓明二十四家詩定二十四卷	黄昌衢編 康熙二十八年刊本	同上
55	四傑詩選	姚佺・孫枝蔚同輯 明刊本	同上
56	四大家文選評林	湯賓尹評選、万曆年間刊本	『李攀龍文学研究』による、230頁。
57	列朝詩集八十一卷	錢謙益輯、順治九年刊本	『李攀龍文学研究』、271頁による。

注：本表は主として『中国古籍善本書目』（上海古籍出版社、1986年）によるが、『古籍』の書目に掲載された明初刊行（康熙朝以前）末清の総集には李・王の著作が記載されていない場合、黄志民『王世貞研究』（政治大学中国文学研究所博士論文、1976年）、第二章「著述」と許建崑『李攀龍文学研究』（文史哲出版社、1987年）、第四章「著述と流伝」とによって判断する。なお、右の黄氏と許氏の研究によって内容の補足をする。その際、備考欄で注する。また、この表で掲載した一部の李・王の別集は総集にも収録されている。

表2 明末清初に出版された『唐詩選』関係書（書名五十音順）

番号	書名と巻数	刊行者と出版年月	備考
1	古今詩刪三十四卷	李攀龍編選、徐中行校訂、汪時元万曆初年刊本	『明代唐詩選本研究』、1によれば、ほかには、②徐中行校訂明刊本と、③

			『詩刪評苑』本と、④『詩刪』という二十三巻の鍾惺譚元春評の朱墨套印本がある。なお、『古籍』によれば、ほかには、⑤三十三巻の烏程閔氏刻朱墨套印本がある。
2	李于鱗唐詩廣選七卷	明凌瑞森等輯評の朱墨套印万曆三年盟鷗館刊本	ほかには、凌弘憲編、朱墨套印本がある。『明代唐詩選本研究』、106頁によれば、このバージョンの刊行時期は明代後期と推定
3	鐫李及泉参于鱗箋釋唐詩選七卷	李攀龍編選 李頤参閱 晏良榮刊行本	同上
4	硃批唐詩苑七卷付録一	李攀龍編選明、孫鉉評点、明刻朱墨套印本	同上
5	新刻錢大史註注李于鱗唐詩選玉七卷	錢謙益 評注 万曆三十八年刊	同上
6	新刻李袁二先生精選唐詩訓解七卷首一卷	李攀龍編選、袁宏道校訂、萬曆四十六年書林余應孔居仁堂刊本	同上
7	唐詩選七卷	李攀龍編選、王 登評、明閔氏刻朱墨套印本	同上
8	唐詩選彙解七卷 首一卷	李攀龍編、徐震校、李德舜刊本	『明代唐詩選本研究』による。
9	唐詩選四卷附一卷	李攀龍編、陳繼儒校四卷本	『明代唐詩選本研究』による。
10	唐詩選七卷	李攀龍編選、蔣一葵箋釋、万曆二十八年武林一初齋刊	『古籍』によれば、次の蔣一葵箋釋の異本がある。①陳繼儒校訂本と、②高江批点本と、③施大猷刻朱墨套印本と、④唐詩選選註という万曆刊

			本と、⑤ 庵重訂李于鱗唐詩選という黄家鼎評の崇禎元年刊本と⑥六卷の『唐詩合選』という劉化蘭増訂の金陵孝友堂刊本とがある。なお、『明代唐詩選本研究』によれば、⑦『庚補箋釋批評唐詩直解』という異本もある。
11	鐘伯敬評註唐詩選七卷 附録一卷	李攀龍編、鐘惺評註、劉孔敦批、明末黎光堂刊本	『古籍』による。
12	陳眉公箋釈李于鱗唐詩選註八卷	陳眉公箋釈 万曆年間刊行と推定	『明代唐詩選本研究』によれば、このバージョンはほかの本と合編されて、『詩壇合璧』と称される。
13	李于鱗先生唐詩選平七卷	葉弘勛撰、康熙元年刊本	『李于鱗先生唐詩選平箋』（潘禾評、乾隆十二年映雪草堂刊本）という評注本がある。
14	古唐詩選七卷	吳吳山評注、康熙三十八 宝善堂刊本	『明代唐詩選本研究』による。

注：本表で掲載された明末清初（康熙朝以前）に刊行された李攀龍編とされる『唐詩選』の諸異本は主として『中国古籍善本書目』（上海古籍出版社、1986年）によって作成したが、金生奎『明代唐詩選本研究』（合肥工業大学出版社、2007年）によって内容の補足をした。

表3 享保以前輸入された李・王関係著作

番号	書名と巻数	輸入または収蔵の年月	依拠した史料
1	彙刻列朝詩集小伝	元禄十二年	『舶載書目』

2	弇州四部稿	寛永十二年種村推寺献本 元禄元年以前輸入本 正保三年文庫收藏本	『蓬左文庫漢籍目録』 『元禄元年の唐本目録』 『御文庫目録』(『御文庫』 と略)
3	弇州四部稿選	寛永年間所蔵本	尾張徳川家の『寛永目録』
4	弇州史料	寛永年間所蔵本 正徳一年輸入本 同上 享保九年輸入本	尾張徳川家の『寛永目録』 『舶載書目』 内閣文庫所蔵の『分類舶 載書目要覧』 『舶載書目』
5	弇山堂別集	正保三年	『御文庫目録』
6	王元美読書(王元美読書 後)	寛永十六年 38頁	『御文庫目録』
7	王元美尺牘	宝永四年	『舶載書目』
8	王鳳州(王鳳州集?)	元禄元年以前	元禄元年の『唐本目録』
9	芸苑卮言	寛永年間所蔵本 正保三年	尾張徳川家の『寛永目録』 『御文庫』
10	皇明經世文編	寛永十六年	『御文庫』
11	皇明百大家文選	寛永二十年	『御文庫』
12	皇明文範六十八卷	寛永二十年	『御文庫』
13	皇明四傑詩選	元禄十二年収録本	『二酉洞』
14	皇明盛事(五朝小説収録 本)	元禄十二年収録本	『二酉洞』
15	皇明詩選	慶長九年以前輸入本	『林羅山既見書目』
16	国雅	元禄十四年	『舶載書目』
17	国朝名公尺牘	元禄十二年	『舶載書目』
18	觚不觚録(広百川学海収 録本)	元禄十二年収録本	二酉洞
	觚不觚録(宝顔堂統秘笈 本)	同上	同上
	觚不觚録(五朝小説収録 本)	同上	同上
19	石倉十二代詩選(十二代 詩選)	蓬左文庫寛永十二年買本 蓬左文庫寛永末年買本	『蓬左文庫漢籍目録』 同上

		正保三年	『御文庫』
20	七子詩集（七才子詩集）	寛永年間所蔵本 寛永十六年以前 正保三年 享保九年輸入本	尾張徳川家の『寛永目録』 『御文庫』 『御文庫』 『御文庫』
21	盛明詩選	寛永十六年	『御文庫』
22	滄溟文選	慶長九年以前輸入本	『林羅山既見書目』
23	続四部稿選	元禄元年以前	元禄元年の『唐本目録』
24	①唐詩選 ②唐詩訓解 ③唐詩訓解 ④唐詩訓解 ⑤唐詩広選 ⑥唐詩選彙解 ⑦諸名家殊 唐詩彙選 （金陵余刊本） ⑧唐詩選彙釈（蔣一葵箋 釋陳繼儒校訂本） ⑨唐詩彙選（蔣一葵箋釋 高江批点本）	寛永十六年以前 寛永年間所蔵本 正保二年 承応二年 天和五年 元禄元年以前輸入本 正徳二年 正徳二年 正徳三年	『御文庫』 尾張徳川家の『寛永目録』 『御文庫』 『御文庫』 『御文庫』 元禄元年の『唐本目録』 『舶載書目』 『舶載書目』 『舶載書目』
25	白雪樓詩集十二卷	慶安三年	『御文庫』
26	百家詩選	正徳三年	『舶載書目』
27	文章九命（説郛収録本）	元禄十二年収録本	『二酉洞』
28	鳳洲筆記	承応二年 慶長九年以前輸入本	『御文庫』 『林羅山既見書目』
29	鳳洲続集	慶長九年以前輸入本	『林羅山既見書目』
30	明詩正声	万治二年	『御文庫』
31	明詩選最	承応三年	『御文庫』
32	明詩選		『分類舶載書目要覧』
33	明十二家詩選	万治三	『御文庫』 『元禄元年の唐本目録』
34	明文奇賞四十卷		『分類舶載書目要覧』

35	李滄溟先生集（滄溟文集・李滄溟集）	寛永十六年以前	『御文庫目録』
		正保元年	同上
		享保十一年	同上

注：本表は以下の享保以前の『舶載書目』（關西大學東西學術研究所、1972年）、『林羅山所見書目』（『林羅山詩集』所収版）、『御文庫目録』（『東西學術研究所紀要』3、1969年）、『蓬左文庫漢籍目録』、元禄元年の『唐本目録』（『史泉』35、36合併号、1967年）、元禄十二年の『二酉洞』（東京大学総合図書館所収本）、尾張徳川家の『寛永目録』（ゆまに書房の『尾張徳川家蔵書目録』所収本）、『分類舶載書目要覧』（内閣文庫所蔵本）に依拠して作成した享保以前に輸入された李・王関係著作の一覧である。舶載書目と書籍目録と両方を利用したので、内容的に重なる可能性があるが、書籍が輸入された数ではなく、関係書籍が輸入されたことを確認するのを目的とする本稿では、差し支えないと判断したからである。